

僕の仕事場にあるもの。若い友人が撮った、2本の木と空のモノクロ写真。陶芸家の友人から買った、人型の小さな焼き物。東日本の震災で流された、屋根材の雄勝石1枚。レコード、CD、ピアノ、ギターが数本と帽子。あとは過去の作品や描きかけの絵と画材があるだけ。飾り物や生活用品などは極力置かない。

と言いながら、僕はけっこうモノ持ちではある。昔拾った流木やガラクタ、それらを使って遊んだオブジェを、別の場所にある部屋いっぱい並べている。今では滅多に足を踏み入れることもなく、どうやらモノへの興味や執着が薄れてきたようだ。

れたように行っていないのだが、なぜかこのところ気になり始めていた。で、オブジェ部屋に行き、残してある20個ほどの石の中から、特に気に入っていた二つを仕事場に持ち帰った。窓際に板を置き、その上に並べてみた。

石

いい！実にいい。ならば良さを伝えたいと、この文

中で石の説明を試みたのだ。

しかし愚かだった。言葉で石を見てない僕にできるはずがないのだ。長々と書いたあげく、これはダメだと没にした。気付くのが遅い。

前置きが長くなった。ここで書きたいのは石のこと。度々通った石拾いも忘

石の形状やおもしろみを書いたところでしょうがない。そうこうするうち石に言われた。「やかましい！」と。いや、僕がそう思っただけ。石は黙って座っている。



なら困るなあ。動物や植物にはつい話しかけるが、石にはしない。反応などしてくれるはずもなく、こちらとて最初から求めてはいない。ただこれも人間の勝手だが、石は無言のうちに自戒をもたらしてくれる。石は尊い。常に揺れ動くのは人だが、石は決して自ら動くことはしない。だから惹かれる。

庄倒的な静けさと強さ。石を前にして、僕はシンと静まり、ズンと入っていく

変哲もない石二つ。河原を歩き、何干、何万の中から僕という人間が選り上げた。傲慢の石だったはずが、そんなことは無意味に思えてきた。石の沈黙。ゴロンの存在。見るだけでありがたい。

方、盆石などのように何かに見立てたりはしない。そのものを見る。だから比喩なんて使いたくないし、切るだろうか。僕が彫刻家

昔、年寄りから「石を拾うと死ぬぞ」と脅された。でも死ななかつた。でも今、少しわかる気がする。

(吉田 淳治・画家)